



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレター 第355号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第355号. 京大東アジアセンターニューズレター 2011, 355

ISSUE DATE:

2011-02-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137185>

RIGHT:

## 目次

- 大陸横断鉄道中国最西端調査と少数民族との交流の旅のご案内
- 読後雑感 : 2011 年 第4回
- PUKU(北京大学-京都大学)初年度の交流活動報告(4)～環境分科会～
- 【中国経済最新統計】

新疆ウイグル自治区、ウルムチ・阿拉山口・伊寧・カシュガル 7 日間

## 大陸横断鉄道中国最西端調査と少数民族との交流の旅のご案内

開催日時 : 2011 年 3 月 22 日 (火) ～28 日 (月)

日中友好経済懇話会が主宰し、京都中小企業家同友会、京大東アジアセンター協力会、大阪能率協会（東アジアセンター協力会法人会員）、などの後援による中国視察ツアーが今年も企画されています。毎年の視察ツアーでは、「次には新疆自治区」と毎回のように候補になりながら、なかなか実現しなかったものがようやく実現しました。前々回は、大陸横断鉄道東端の連雲港を調査し、前回は横断鉄道の中国国内中間点の西安と重慶を調査しました。今回は是非、西端の阿拉山口にということでウルムチから鉄道に乗って参ります。また、京都大学の強力なコネクションを使って、新疆大学あるいは新疆财经大学で大学教育の実態を知るとともに、自治区主席のヌル・ベクリさんとの面会も実現できる見込みです。「暴動」にまで発展した民族矛盾は現場を見なければ分かりません。「暴動」の現場、漢族を大量に救ったウイグル族ホテル、そして、出稼ぎ送り出しのカシュガル周辺の県、「賛否両論」といわれる旧市街地の再開発の現場なども見学します。東アジアセンター協力会の大森副会長が副団長のほか協力会会員の三統株式会社など多くの会員様のご協力を得て企画準備を進めています。具体的な日程は以下の通りです。めったにない機会ですので、ご希望、ご関心のおありの方は、是非ご参加下さい。

3/22 (火)	大阪→北京経由→ウルムチ	関西空港から北京経由ウルムチ着 トマリスホテル泊
3/23 (水)	ウルムチ	大バザールなど「暴動」の現場見学 自治区主席訪問 食事会 泊
3/24 (木)	ウルムチ→夜行列車で 阿拉山口へ	新疆大学訪問 又は新疆财经大学 夜行列車で阿拉山口へ、車中泊
3/25 (金)	阿拉山口→伊寧へ	阿拉山口税関調査 バス移動→伊寧へ 伊寧城など見学 泊
3/26 (土)	飛行機でウルムチへ その後カシュガルへ	飛行機伊寧→ウルムチ積水化学見学 午後：カシュガルへ 泊
3/27 (日)	カシュガル 疎附県 ウルムチ	疎附県見学 午後ウルムチへ 晩餐会 泊
3/28 (月)	帰国	帰国の途に

予定しています旅行費用は、200,000 円 (概算、2 人一室利用、1 人部屋追加料金 24,000 円)、ホテルは四つ星クラスです。ご希望の方は 2011 年 2 月 10 日までに下記までご連絡頂ければ幸いです。

〒602・8026 京都市上京区新町丸田町上る春帯町350機関紙会館 2 F 日中友好経済懇話会訪中団事務局  
竹内章 F A X 075-254-2341

## 読後雑感 : 2011年 第4回

07. FEB. 11

中小企業家同友会上海倶楽部代表  
東アジアセンター外部研究員(協力会理事)  
小島正憲

### 0. 第3回分の訂正と補足

1. 「中国の言い分」
2. 「オレ様国家・中国の常識」
3. 「それでも、中国は日本を越えることができない！」
4. 「超大国 中国の本質」
5. 「中国が世界に知られたくない不都合な真実」

### 0. 第3回分の訂正と補足

読者の方々から、第3回分の読後雑感について、下記のような指摘を受けたので、まず訂正および補足をしておく。

#### ①. 《2. 「日本人と中国人はなぜ水と油なのか」 太田尚樹著》

また太田氏は、「江沢氏が子供のころから抗日教育を受け、日本嫌いになった」と書いているが、これは大きな間違いである。江沢氏はハルビン工科大学の出身であり、むしろ日本の影響を強く受けており、政権の座に着いてからそれを追及されるのをかわすために、「反日」のポーズを取らざるを得なかったというのが真相である。

上記の私の記述に対して、「江沢氏は父親から抗日教育を受けたわけであり、それを否定する材料がないかぎり、太田氏の主張を誤りであると断定することはできないのではないか」という反論が、読者から寄せられた。たしかに一理あると思うので、「江沢氏が幼少時にどのような教育を受けたか」を研究した後、この記述の変更の有無を検討する。

#### ②. 《3. 「中国最大の弱点、それは水だ！」 浜田和幸著》

「中国が戦略的なのは、ハードパワーとソフトパワーをセットで使うことにもある。たとえば、いま世界中で次々と建てられている孔子学院は、ソフトパワーの好例であろう」とも書いているが、この孔子学院が実際には、その意図した効果をまったくあげ得ていないという現実を知らない。

上記の私の記述に対して、「まったくあげ得ていないという表現は正しくない。日本の孔子学院でも少数ではあるが、着実に履修生を出しているし、世界各国の学院の実情を明確に把握してからでなければ、まったくとはいえないのではないか」という指摘が読者から寄せられた。たしかにご指摘の通りなので、「まったく」という字句を削除することにした。なお、今後、世界各国の孔子学院を実際に訪ね、現場で検証することによって、中国政府が意図した効果をあげ得ているのかを追及してみたいと思っている。

#### ③. 《5. 「中国の恫喝に屈しない国」 西村眞悟著》

なお文中で西村氏は、「第二次世界大戦が勃発してナチスドイツが欧州を制圧したときだった。2万人以上のユダヤ人難民がナチスから日本へ逃れるため、シベリアを越えてソ連満州国境に集まっていた。わが関東軍は多くの救援列車を仕立てて、この2万人を越えるユダヤ人を救出した。外務省を通じたナチスドイツのわが国への厳重な抗議に対して、救援列車によるユダヤ人救出を裁可した**関東軍参謀長東條英機中将**は、“当然なる人道上の配慮である”と一蹴した」と記述している。

上記の私の記述に対して、2人の読者から下記のようなメールが来たので、ここに掲げておく。

- ・「あれは**樋口中将**でしょう。樋口中将はソ連の戦犯指定に対してユダヤ人社会が占領軍へ働き掛け、無罪へさせております。私は特務機関について調査しており、**東条**はハルビンの特務機関とさしたる関係はなかったでしょう。憲兵はスパイに向きません。ユダヤ人に対応したのは特務機関関係者でありました」。
- ・「満州でユダヤ人を保護したことは有名な話です。ただし、戦後に満州の話が広がりにくいために杉原外交官のユダヤ人救済にスポットが当たったのです。日本陸軍とユダヤ人の関係は日露戦争時にユダヤ人が日本の国債を買ってくれたことから始まり、陸軍の中にはユダヤ人に助けられたとの意識があったとのことです。またアメリカのユダヤ人へ日本を攻撃しないようにアピールしたかったというねらいもあったようです。ユダヤ難民に対して満州国入国の便宜を与えた**樋口季一郎ハルビン特務機関長（終戦時は中将）**はソ連から戦犯要求を受けたが、ユダヤ人の助けで戦犯にならなかったとのことです。イスラエルに樋口中将の記念碑があるらしいとのことです」

### 1. 「中国の言い分」 鈴木秀明著 廣済堂新書 1月31日

副題 : 「なぜそこまで強気になるのか？」 帯の言葉 : 「中国が日本に突きつける言葉の数々。

あの国の本音と建前がサクサクわかる！ なるほどそういうことだったのか！！」

中国情報専門の“サーチナ”を主宰している鈴木秀明氏のこの著書は、「中国の言い分」を的確に捉えていておも

しろい。それでも鈴木氏はあとがきで、「中国人」といっても、さまざまな考えの人、性向の持ち主がいます。当たり前のことですが、外国の人と接する場合には、どうしても“〇〇人は……”という発想になりがちです。本書で論じた“中国人”とは、あくまでも全体的な傾向であることに留意してください」と謙遜して書いている。この本は、問題ごとにまず「中国の言い分」を紹介し、それを解析するという記述スタイルが取られており、読みやすい。

まず鈴木氏は尖閣諸島問題に関して、「(中国は)歴史に裏打ちされた被害者意識の影響があり、中国は国際法に対して強い不信感を持っています。列強が自分たちの都合に合わせて作った国際法は“中国にとって不利な部分がある”と思えてくるからです。日本と中国の主張が真っ向から衝突する原因はこの辺にもあります」と書き、日中の国際感覚のズレを指摘している。また尖閣諸島近辺の資源問題についても、「実際にはさしたる埋蔵量ではないという説が有力」と書き、「一度中国の領土であると声をあげたからには、たとえ海洋資源が大したことがなくても、振り上げた拳を引っ込めるわけにはいきません。そんなことをすれば、政府が国民から“かつての侵略国である日本に対して、今になっても弱腰”だと突き上げられる事は間違いないからです」と、中国政府の本音に迫っている。沖の鳥島問題にも言及している。

レアアース問題についても、「レアアースの産地では、中央政府が生産管理を強化した2006年以降、レアアース鉱石の盗掘が横行し、違法な生産工場が乱立しました。取り締まりの警官を逆に襲撃するような事件も起こりました。環境保全の意識も浸透していません。中国にとって、レアアースは貴重な資源であると同時に、扱いの難しいお荷物にもなってしまった感があります。…(中略)これまでは“鄧小平戦略”に基づき、レアアースは中国にとって外交カードのひとつでした。ところが、レアアースを必要とする国が、“中国は頼れない”と別の国に全面的に接近すれば、レアアース以外の分野でも、中国は外交交渉における有利さを減少させてしまうのです。いずれにせよ、中国からすれば頭の痛い話ばかりです」と書き、中国政府の混迷ぶりを描き出している。

チベット問題についても、「中国政府は1955年には、現在の四川省内のチベット人居住地域の“社会改革”に着手しました。貴族や地主など世俗人に対する特権の廃止を求めているうちは、まだよかったのです。土地を与えられた農民は喜びました。ところが、寺院の土地やその他の財産に“手をつけた”ことで、チベット大衆の、共産党に対する見方が一転しました。彼らにとっては、手をつけてならない、文字通りの“聖域”だったのです」と書き、その真相に迫っている。さらに「あるチベット仏教僧が語ったところによると、チベット民族の中で本当に中国から独立したいと考えているのは、5%にも満たない少数派で、独立してもやって“いけない”“貧困にあえぐ可能性が高い”と考える人が大多数というのです」、「かつては少数民族であることを隠す人が多かったのですが、今では“何かと得”と考える人が増えました」と、チベット人の本音の一面を紹介している。しかも「中国全体で問題となっている腐敗問題は、少数民族地域では増幅しやすく、しかも同程度であっても一層大きな社会問題になりやすい」と、鋭く指摘している。

人民元切り上げ問題についてもそのメリットにも注目し、「投機マネーの流入に対する抑制効果」、「物価上昇への歯止め」などを挙げている。

戦後処理問題についても、「“軍国主義者”にすべての責任を負わせることは、中国の立場では“日本人に逃げ道を”残したことにほかならない」と書き、それでも「当時、衆議院は男子普通選挙制を採用していました。とすれば、日中戦争を煽った責任は、選挙民にもあることになります。とくに日本軍が上海に上陸して、南京に攻略の手を進めると、多くの日本人が熱狂しました。新聞なども、戦意を高揚させる“勇ましい記事”をこぞって掲載しました。極めて厳しい情報統制があったことは事実としても、日本は“勝ち戦”に熱狂したのです。つまり、“日中戦争の責任は日本にある”というのなら、“戦争の責任は、程度の差こそあれ日本人全体にある”と言わなければならないことになります」と続けている。私もこの意見には、大賛成である。

北朝鮮問題については、「中国と北朝鮮を結びつけているのは、双方の“現実的な利害関係”なのです。そして、中国と北朝鮮の利害がかならずしも一致しない場合も増えてきました。中国は北朝鮮に対し不快感を持っていると考えられます。中国側から見て、その最大の原因は“北朝鮮が言うことを聞かない”ことです」、「支援しているのに、肝心なときに役に立たない国」などと書いている。

## 2. 「オレ様国家・中国の常識」 宮崎正弘著 新潮社 1月15日

帯の言葉：「何事も常に相手が悪い、ウソは生き抜くための方便、カネで駄目なら暴力で」

巻では、宮崎正弘氏は日本を代表する中国ウォッチャーであると言われている。たしかに今まで、宮崎氏がその堪能な英語や中国語を武器に、中国全土をくまなく自らの足で歩き回り、その体験をもとにして書いた文章には迫力があつた。しかしながら今回の著書には、そのスタイルが貫かれておらず、最近、ことにこの1年間の中国現場ウォッチの報告が全くない。したがってどこかの情報の焼き直しみたいなものが多く、宮崎氏独特の切れ味が鋭い論評を本書から賞味することはできない。

宮崎氏は「中国人の考え方では、戦争は悪いことではないのである」(P. 174)と書いている。この記述から宮崎氏の戦争観は「戦争は悪いことである」と、推定することができる。ところが宮崎氏は、「日本の尖閣問題の解決方法は明らかである。…(中略)日米軍事演習を尖閣の周辺海域で展開し、自衛隊の艦隊を遊弋させ、魚釣島には陸上自衛隊を常駐させるのである」(P. 47)と書いている。もし宮崎氏が主張するように、自衛隊を魚釣島に常駐させたら、それは中国との関係を一層緊張させ、戦争の危機を招来する。戦争が悪いことでありあくまでも戦争を回避するという観点



に立つならば、まず丸腰の「老人決死隊」を尖閣に送り込むべきである。自衛隊を常駐させるなどという策を取るべきではないし、それは宮崎氏の戦争観とは矛盾するものである。

この本で宮崎氏は、今までの同氏が主張し続けてきた中国分析を巧妙にすり替えている。たとえば今まで宮崎氏は、中国においては労働者の失業がきわめて大きな問題であると書き続けてきたが、本書では「3K 現場では労働者不足、…(中略)とくに広東省、浙江省などでは黒人労働者までが目立つ。“20年後に少子高齢化が中国でもすすみ、1億人の労働者不足に陥る”」(P. 17)と書き、中国の人手不足現象を認め、失業対策問題が中国政府の最大の課題の一つであるという氏の従来の主張を、巧妙に取り下げている。また三農問題についても、本書ではほとんど取り上げていない。また「反政府暴動は毎年12万から13万件、パトカー焼き討ち、政府建物に放火、住民暴動は荒々しさに比べても制御された、十数件の反日デモなんぞ無視しても良いくらいだ」(P. 95)と書いているが、この文章は理解し難い。中国の暴動については、私の現場検証を読んでもいただければわかると思うが、政府の建物に放火するほどのものは少ない。それはさておき、下線の部分は「これらの住民暴動の荒々しさに比べれば、制御された十数件の反日デモなんぞ」と書くべきではなかったのか。

本書における宮崎氏の記述には、事実誤認や解析不足も多い。たとえば「中国はカシュガルの古代都市の中心にあったモスクを破壊し、イスラム教徒を集団住宅へ移住させた」(P. 155)と書いているが、私の現場検証ではこのような事実はなかった。宮崎氏が破壊されたモスクとやらの名前と住所を、明示してくれれば、私はただちに検証に行ってみたいと思っている。「中国へ進出したのは良いが、運営に失敗する日本企業があとを絶たない」(P. 72)と書いているが、これも極論であり、「儲けている企業も多い」のも事実である。その他、習仲勲(P. 11)、遺棄化学兵器(P. 45)、延安(P. 165)についても誤認個所があり、イタリアの温州商人(P. 21)、闇経済(P. 130)、特許申請件数(P. 138)、土地売買(P. 139)、少数民族の実態(P. 219)については、解析不足個所がある。

私は今、「開高健を偲ぶベトナムツアー」に参加してサイゴンに来ており、ホテルでこの文章を書いているが、中越関係の宮崎氏の分析は的を射ており、この点では学ぶべきことがあった。また開高健が中国の文化大革命に関するルポを書いていることを本書で知った。さっそく購入して読んでみたいと思っている。

### 3. 「それでも、中国は日本を越えることができない！」 黄文雄著 WAC 1月27日

副題：「ほんとうの理由77」

帯の言葉：「少子高齢化、貧富の格差拡大は、日本以上に深刻！ 環境悪化、有毒食品の摂取で不妊率が急増！

中国からの大脱走は年間3百万

人！」

巷では、黄文雄氏は日中文化比較研究の第一人者と言われている。たしかにこの本でも、その博学多識ぶりをたっぷり披露している。この本の題名の「それでも、中国は日本を越えることができない！」については、私も同意見であるが、その根拠は黄氏とはかなり違う。黄氏は、「従来の中国覇権論や中国人の時代論は、たいてい“経済”を論拠にするものが多い。“物”からだけで、あるいは“数”からだけで、“心”や“質”から視点をはずしたら、日中の全体像は見えなくなるだけだ。うまく行っている中国と、うまく行っていない日本の分野だけをとりあげ、日中の優劣を語っても独断と偏見としかいえない」と言っているが、この本での黄氏の記述は、すべてが大雑把であり、同時に独善的であり、根拠が薄弱な個所も多く、その意味では黄氏の上記の文言はそのまま彼自身に降りかかっている。

歴史的な分野における黄氏の主張はともかくとして、現代中国の記述には根拠が薄弱な推論や意味不明の個所が多い。それらを下記に書き出しておく。

- ・「現在、中国からの大脱走は、私は年間300万人と推計する」(P. 41)
  - ・「中国の労働力は無尽蔵といわれても、じっさい単純労働力は極めて不足で、“過剰から不足へ変わりつつある”という中国経済専門家の話はうそである」(P. 69)
  - ・「(地下経済は)中国でもたいていGDPの3分の1かそれ以上、台湾とほぼ同じくらいらしい」(P. 79)
  - ・「改革開放後、匪賊が復活。2000年に入っても約5万グループ、1千万人いると推定され、…(中略)殉職した警官だけでも、年間2千人前後とも伝えられている」(P. 85)
  - ・「性病が大流行、2007年ではすでに6千万人がかかり、毎年40%ずつ急増している。今では、性病が中国人の三大死亡率の一つとなっている」(P. 89)
  - ・「たとえば湖南省のある村では、2500世帯の9割が家族連れで南下、乞食村として村起こしに成功」(P. 91)
  - ・「公金着服は当たり前のことで、たいてい年間国家予算の5分の1が個人のポケットマネーとして国外流出」(P. 143)
  - ・「脳の発達に形成不全な地域住民は約4億人以上で、後天的な社会環境の劣化から、精神異常者は17歳以下は約3500万人、全国の成人は1億人以上ともいわれる」(P. 205)
  - ・「現在、中国人麻薬経験者は4人に1人という説もあるが、サッカー場での公開処刑は世界名物の一つ」(P. 211)
- なお黄氏は、中国国家を「巨大な蜃気楼」と呼んでいるが、それは実存しており、「砂上の楼閣」と呼ぶのが正しい。

### 4. 「超大国 中国の本質」 中嶋嶺雄編著 KK ベストセラーズ 2010年12月30日

帯の言葉：「尖閣燃ゆ！ 日中は対決せよ！ 北朝鮮を決して見捨てない“赤い帝国”」

この本は、中嶋嶺雄、渡辺利夫、石平、宮崎正弘、黄文雄、川添恵子、潮匡人などの保守論客そろい踏み共同著作である。これらの保守論客に共通しているのは、中国が「超大国」であるという認識である。私は現在の中国が、「砂上の楼閣」であり、「超大国」でも「強国大国」でもないと考えている。したがってこれらの保守論客の分析や論述は、その根底から間違っており、無意味に近いものであると考える。

トップバッターの中嶋氏は、「日本人の中国像や中国認識を支えてきた要因」として、第1に「中国文明、あるいは中華思想というものが日本にもたらしたインパクト」をあげ、日本人は「中国という古くて大きな文明に無意識のうちに飲み込まれてしまうという弱点を潜在的に持っているような気がしてならない」と書いている。第2に「第二次大戦後に革命中国が出現したことに対するある種の共感」をあげ、「多くの知識人もまた中国には強い憧れを持ち、社会主義中国を非常にバラ色に描くようになる。それが中国へのシンパシーとなって、日本人の中国像に相当の影響を与えた」とも書いている。第3に、「日本はかつて中国を侵略したのだから、その償いをしなければいけないという贖罪感」をあげ、「この贖罪感が、自虐意識につながっている」と主張している。私もこれらの分析は間違っていないと思う。

ただし、続けて中嶋氏が、「日本は贖罪感から解放されてよい」、「戦後、自国の権力が一人も殺していないという事実を見ることなしに、あるいは見ようとせずに、中国を侵略したということだけを強調することは、現在の強国大国・中国と付き合っていく上ではもはやあってはならない座標軸なのだ」と主張している点には、同意できない。私は中国人が被害者意識を払拭していない限り、たとえそれが自虐意識といわれようが、日本人は贖罪感を持ち続けるべきであると思う。常に贖罪感を持ち、頭を低くして中国人に接することで、余計なトラブルを避けることができるからである。中国は「強国大国」ではなく、「空威張り大国」である。また日本は衰亡しつつある国家ではなく、やがて思想的な大変革を遂げ、再興する国家である。その日本が中国と付き合うには、「金持ち喧嘩せず」の態度がふさわしいと考える。

渡辺氏は、「大国化する中国に対抗して日本が、東アジアにおいて行動の自由を確保し、みずからの存在を確実に証す決定的に重要な2国間関係が日米同盟である」と書き、東アジア共同体などという「さしたる戦略もなく、言葉は美しいが、内実の不鮮明な“鶴”のような怪物に日本が飲み込まれることだけは避けねばならない」と主張している。

石平氏の小論は、同氏の従来主張の繰り返しで、新しい視点からの物はない。尖閣諸島問題以降、同氏の著書「私はなぜ中国を捨てたか」が書店にうずたかく積まれており、この問題で一番儲けたのは石平氏ではないかと、私は思っている。

宮崎氏や黄氏の小論は、前掲の2. や3. で解析したものとはほぼ同様である。

川添恵子氏の小論は論旨がかなり混乱している。この小論の前半で、同氏は中国人が北海道などの土地を買い漁っていることに警鐘を鳴らしている。「(中国人の)2束3文の私有林の買い漁りは、損をしない幾つもの筋書きがあるとみていい」と書き、その筋書きを「(中国人は)投機目的、新たな利益確保の一つと捉えているはずだ」、「慢性的な水不足が続く、“水の確保が死活問題”と指摘される中国にとって、日本の森林面積の4分の1を占める北海道は掌中に収めたい“超優良物件”なのだろう」と推測している。しかしこの川添氏の記述は、あくまでも推測の域を出ないものであり、論拠に乏しい。

さらに川添氏は、「近々に千歳市周辺はカナダのリッチモンド市と同じ運命を辿ることになるだろう」と推測し、続いて移民中国人に乗っ取られたリッチモンド市の惨状を具体的に書き込み、日本人読者の不安感を煽っている。しかしそのすぐ後で、「日本は幸いにして、投資移民や技術移民といった移民受け入れ制度はない。が、日本国内での移動の自由はある」と書いている。この部分は説明不足で意味不明であり、川添氏の頭の中の混乱ぶりが露呈したのではないと思われる。川添氏の論を素直に読み進めれば、「日本には移民制度がないから、リッチモンド市のようにはない」という結論に落ち着くのだが、いかがなものだろうか。中国人のリッチモンド市の不動産の買い占めは、移民した中国人たちによって行われているものであり、彼らは明確に顔の見える買い主である。日本の不動産の買い占めは、川添氏が書いているように、「買い主、施工主の顔が見えない」、「香港系というよりは中国政府系では？」によって行われている。つまり両者はかなり違っており、「同じ運命を辿る」ことはない。

川添氏はこの小論の後半の部分では、一転して、ブータンの国土を中国が侵していると書いている。同氏は「首都ティンブー在住者から聞いた話だが、北部の山岳民族がこう語っていたという」と書き、「又聞き」で、中国がブータン国境を侵していると主張している。ノンフィクション作家を自称する川添氏ならば、これらの事実を自らの目で検証し、小論をしたためるべきである。「又聞き」では、この小論がフィクションと見なされても文句は言えない。しかし私とても、ブータンの現場など見たこともないので、中途半端な批評をすることはできない。今年中に、ブータンに行き、川添氏の小論の真偽をこの目で確かめてみたいと思っている。

潮氏はこの小論で、「軍事でも経済でも中国に抜かれた日本」と述べ、今後の10年間で「日中間で激しい利害衝突が繰り返される」と予測している。軍事面での日中比較については、次の読後雑感で検討してみたいと考えている。

## 5. 「中国が世界に知られたくない不都合な真実」 板東忠信著 青春出版社刊 1月5日発行

帯の言葉 : 「マスコミが絶対に書けない“ゆがんだ大国”の本性を暴く」

坂東忠信氏は、警視庁勤務18年の捜査官で、北京語が話せることから、中国人犯罪者やその関係者1400人と向き合ってきており、退職後、その経験をまとめて本著を書いたという。つまり本書に登場するのは、中国人の中でも悪人の部類に属する人物であり、善人は少ない。したがってそのことを十分に考慮して、本書を読まなければならない

い。

板東氏は本書で日本に在住する中国人の生態や中国そのものについて、いろいろと解説しているが、そのほとんどが状況説明の範囲にとどまっており、その根拠や解決策については語っていない。下記にそれを列挙しておく。

・超「少子高齢化」の中国は日本を目指す ・攻撃性を高めてしまう中国語 ・一般レベルでは今も親日国家である台湾

・暴動の発生件数は2009年には、年間10万件 ・「国防動員法」で中国在住の日本人が人質に

・お見舞い金欲しさに自殺者が多発 ・中国に進出した日本企業が没落していく過程

板東氏は、中国人は交通ルールを守らない人が多い、「(日本は)中華モラルのドライバーで溢れてしまうかもしれない」と心配しているが、日本よりも中国人が多い、カナダやオーストラリアでは交通ルールなどが厳格に守られており、決して中華モラルに成り下がってはいない。問題は、それらの交通ルールを執行している日本人の側にあるのではないかと、私は思っている。

板東氏は民主党の議員には旧左翼活動家が多く、極左政権だと決めつけ、返す刀で自民党にも「つながりをたどれば大きな声ではいえない勢力が見え隠れする」と言い、ウルトラ保守政権誕生への道を巧妙に敷設している。

以上

\*\*\*\*\*

## PUKU(北京大学-京都大学)初年度の交流活動報告(4) ～環境分科会～

文責：京都大学経済学部 4 回生 陳 曦

PUKU についてお伝えするのも、今回が最後となりました。

まずは環境分科会の会期前および会期中の活動を、そして一スタッフとして思うところを、以下に述べたいと思います。

### ■テーマと理由

「環境」という、漠然だが益々重要になるテーマについては、資源の再利用や新エネルギーなど、様々な切り口が考えられました。分科会長同士で話し合った結果、京都と北京の二都市のあり方を含めた、広く深い議論ができるのではとの期待も込め、今年の環境分科会は「都市交通」に焦点を当てました。

京都会期では、歴史と文化豊かな京都のまちづくりに資する、環境保全型交通の提示を目標としました。会期中のプラン策定に向けて、環境そのものと、多様な交通手段に対する考えを深めるため、自主勉強と教授へのヒアリングを事前の準備として行いました。

### ■事前勉強・ヒアリング

自主勉強会を2度開き、「環境問題とは何か？」についての意見交換や、国内外で導入されている環境保全型交通手段のケーススタディを行ないました。

また、京都大学の植田和弘教授（環境経済学）と中川大教授（土木交通学）にヒアリングをし、理論と実践の両方からテーマへの理解を深められるよう心がけました。

こうした準備を通して、メンバー一同が感じたのは、「環境保全のために人々に動いてもらうには、何らかの具体的なインセンティブが必要」ということでした。「環境保全」はCO2削減以上に深い意味を持つもので、とりわけ京都では、魅力的なまちづくりと両立させる必要性があると感じました。

北京では政府主導の規制や技術開発で、環境保全が急ピッチでなされているイメージがありました。京都の特色ともいえる、地道な産官学連携によるまちづくりの視点が、北京側にどれほど伝わるのだろうか？そうした不安も持ちながら、互いが対面し一緒に議論する日を待っていました。

### ■京都会期中活動

[フィールドワーク]

京都で環境や交通と関わる分野で活躍されている、下記の方々にお世話になりました。

### □京都市地球温暖化対策室および「歩くまち・京都」推進室

市のCO2削減に向けた取り組み、中でも住環境整備や観光政策と一体化された「自家用車から公共交通へのシフト施策」について、主にインフラ整備や意識喚起の面からお話を聞きました。環境問題を語る際の「交通」という切り口の重要性を知り、また、環境モデル都市としての京都の責任もリアルに感じ取



ることができました。

解決すべき課題の示唆もたくさん頂きました。道路渋滞が観光客の一番の不満点となっており、一方で、車流量の少ない大道路があることを教えて頂き、また、市の取り組みが十分に認知されず、まち全体を歩行者にやさしい空間にするにはまだ道のりが遠いことも、気兼ねなくお話し頂きました。市民の声を念入りに調査して新しい計画を始めるという、市政府の慎重なやり方そのものも、とても深く印象に残りました。

#### □エムケイ株式会社

実際に使用しているハイブリッド車両の見学を通して、車の性能や導入後の手応えについて教えて頂きました。顧客の一部が、エコなイメージや乗り心地の良さに、確かな付加価値を見出してくれていると知り、省エネ技術の可能性を感じました。

タクシー業界の変遷や、その折々におけるエムケイの取り組みについても詳しくお話し頂きました。特に、一企業でありながら地域の交通のあり方を提言してきた点は、北京側をはじめとして、メンバーの印象に残るものでした。終盤では、「市中心部の公共交通と郊外のタクシーとを有機的に結合させる」という構想を紹介して頂き、個別の交通手段を超えた、京都の交通のあり方について考える広い視点を得られました。

#### □京エコロジーセンター

北京で環境保全のプロジェクトに参画した JICA 職員の方に案内して頂き、省エネ仕様で、青少年向けの環境教育の展示物で飾られた同センターを見学しました。「施設全体を環境意識普及のショーケースにする」というコンセプトは新しく感じられました。分科会が焦点を置く「交通」から離れ、環境保全への個々人の意識向上について深く考えさせられました。

おとなしく話に聞き入る京都側に対し、「施設を見せるだけではもったいない」「企業に有償で実験台を提供しビジネスにしては？」と北京側から意見が相次ぎました。JICA のプロジェクトも、理想をより所にする日本人と、実利を重んじる中国人とで認識の刷り合わせに時間を要したそう。文化を跨ぐ協力の難しさを学生ながら感じ取りました。



#### □株式会社堀場製作所

自動車排ガス測定装置の製造という、間接的だがインパクトの大きい、本業を通じた環境保全に触れました。工場見学では、世界中でニーズが高まっている製品を実際に見せて頂き、環境問題の大きさを改めて感じました。

訪問全体を通して、京都企業の特徴とされる、大らかな社風と技術への強いこだわりを肌で感じました。現在働いておられる中国人社員二人ともお会いして、中国でのビジネスの現状や課題をお話し頂きました。こうして、環境問題のみならず、日中の今後の協力可能性、そして自分たちが将来仕事でそれに関わることの可能性に思いを馳せる、良い機会となりました。

#### □株式会社タナカテック



とある参加者の人脈で、創業して 70 年になる家族企業を訪れました。社長をはじめとする方々から、3S（整理・整頓・清掃）運動など、試行錯誤しつつ社内の環境改善に取り組んできた経緯を教えて頂きました。社長によると、最近は京都の他企業が同じようにしようと視察に来ることが増えたそうです。良い取り組みが「人」を通して伝播される、京都のコンパクトさを感じました。

大企業にしか馴染みのなかった私達から、「規模を拡大する予定は？」など、経営上の質問が絶えませんでした。社長の返答には、「京都の人は『拓げる』よりも『続ける』を重んじる」という言葉があり、皆の心に

残りました。

#### □京都まちづくり交通研究所

ヒアリングでお世話になった中川教授から紹介して頂き、四条と京都駅を結ぶ「よるバス」の設立に関わった、同研究所長にお会いしました。よるバスは、商店街の店主と教授がタイアップして市政府に提案し、タクシー会社に委託して始められた、産官学連携の良い例です。その経緯について、詳しく語って頂きました。



お話を通して感じたのは、複数の観光スポットを繋ぐ交通ルートが、年間観光客 5000 万人を抱える京都では重要な役目を担うこと。そして、異なる立場の人々が政府に働きかける大変さを知りました。よるバスのように、始めから意図された「環境保全」ではなく、結果として人々自家用車を使わなくなる方が自然に感じられました。

## □NPO 法人環境市民

実際に行われた、政府や企業を巻き込んだ取り組みや、個人に変化を促す取り組みをご紹介します。発信と行動、双方の主体として、市民のポテンシャルが想像以上に大きい

ことを教わり  
ました。交通

については、過去の実現されなかった取り組みも教えて頂きました。大きな意義があるプランも、ハード面の整備には採算問題が付きまとうため一筋縄ではいかず、実現の難しさを感じ取りました。

「自転車と歩行者にやさしいまちづくり」の観点で、京都を北京と対比させ、京都では自転車が歩道を走り、道路脇に店や古跡が点在しているという特徴を洗い出しました。外に出て、十数年前に改修で活性化された三条通を実際に散策しながら、「まちを楽しむ空間」の重要性について意見交換しました。環境分科会として、そして歴史という縦軸の情報を加えて眺めた三条は、いつもと違って見えました。



## 【討論、プラン】

フィールドワークを通して得られた、「環境保全は結果としてもたらされるもの」との認識から、さらに京都にとっての観光の重要性に着目し、既存のリソースや取り組みを繋ぎ、補完して、環境保全をもたらすひとつのシステムを作られればという思いがありました。

地域の課題である夕刻からの三条四条通の渋滞は、とりわけ観光シーズンでは、自家用車で上洛しそのまま観光している人と通勤者とのぶつかり合いが引き起こしています。その課題を解決する手段として、京都駅に車で来た観光客がバス（シーズン限定、短距離往復運行）で北上し観光を楽しみ、夕刻にレンタルサイクル（数箇所の拠点に設置、トラックで回収）で南下し市中心に戻っていく、一日観光プランを企画しました。南低北高の地形と、まだ十分に注目されていない北の観光資源、市政府のパークアンドライドの取り組みを活かし、地域の課題解決と環境保全の両立を目指したプランでした。

単なる議論ではなくアウトプットを心がけるのが PUKU の趣旨でしたが、実際は、限られた準備時間をアイデア練り上げに割り、実行方法まで考える余裕を作れなかった、というのが反省です。プランニング後半の具体論に差し掛かり、様々な業者への働きかけ、プランの PR、採算性など、一つの計画を行うために考慮すべきことの多さに気付きました。

## ■北京会期活動の概要

北京会期中は、国家競争力の向上のために政府主導で開発が進む電気自動車（EV）の、一般市民を対象にした普及策を考えました。教授やメーカーの方々への訪問や充電スタンド見学から、電気自動車の現状を知り、展覧館やエコモデルハウスへの訪問によって、北京の都市計画や環境保全について理解を深めました。京都会期とは異なり、「技術」「トップダウン」が討論のキーワードとなりました。社会の相違を感じながら、京都会期と同様にプランニングをしました。出来上がったのは、EV の 3 段階導入策（政府用車→商用車→自家用車）。PR には企業・地域商店を巻き込むボトムアップな手法、価格設定は入札形式にするなど、京都側メンバーのアイデアもちりばめられたプランとなりました。

京都側にとって、北京を舞台に、中国全体の発展に関わるプランを作る過程は刺激的でした。北京側に、考えを懸命に説明したものの、「非現実的」と言われてしばらく落ち込んだり、議論が細分化するにつれて北京側との語学力の差がネックになったりと、決して効率的なプランニングではありませんでした。それでも、現実的なプラン策定を前提にしていることが、一人一人の妥協を最小限に抑え、「違う視点を取り入れるとはこういうことだったんだ」と互いに気付く、有意義な時間を過ごせました。



## ■分科会長としての所感

PUKU で、かけがえのない経験をしました。

まず、分科会の一メンバーとして、社会の将来に思いを馳せるたくさんの方々とお出会えたこと。

振りかえれば、環境や交通という、公共性が高く地域のあり方に深く関わる分野だからこそ、訪問した先々で「未来」に目を向けた話が多かったです。挫折談や検討段階のアイデアを聞き、今後どうすればよいか考える姿を見ることもしばしばで、遠かった問題がすぐそこに感じられ、関与する意欲が湧きました。

そして、京都会期のリーダーとして、皆が一つの目標に向かうための土台を作れたこと。

環境分科会長を務めたのは、一番漠然としているから鍛えられそうという、自己本位の理由からでした。自分が分かっていない分、フィールドワークを念入りに段取りし、討論ではメンバー間の意思疎通に徹しようと思っていました。私の環境問題に対する見解の乏しさのせいで、分科会が右往左往した時もありました。しかし、皆が一つ一つのフィールドワークで「その瞬間に学べることを」を精一杯吸収し、言葉と文化の違いを超えて議論を繰り広げている事実が嬉しくて、疲れ知らずの日々を送りました。

素人の学生でも、個人の熱意・外からの情報・視点をぶつけ合える環境があれば、価値のあるアウトプットは出ると知りました。私が後の二つを提供できたのも、分科会メンバーの支えがあったからで、感謝の気持ちをずっと忘れないでいようと思います。



## ■2011 年になって思うこと

様々な報道で「政冷経熱」の「政冷」を感じるのは、双方に親しみを持つ一個人として、時には不安になります。しかし、顔の見える関係を作ってしまうと、世論に左右されむやみに不信感が増幅することはない。それが、PUKU が立証できた（これから立証していく）小さな事実ではないかと思います。

特に環境保全は、日中の重要な協力分野となっていくと言われています。環境分科会は、

PUKU の 3 つの分科会で一番、「日本が中国に教える」といった上から目線が伴いやすかったように思っていたけれど、実際は、京都の空の青さに感動していた北京大生と同様に、北京で政府の力強さや人々の自信を目の当たりにした京大生も、学んだものは数多くありました。こちらのほうが進んでいるから、といった先入観は、一切不要でした。また、互いに異質だから色々障害があるだろうという前提で付き合うより、共通問題に着眼し、良いものを取り入れる、そうした真摯な態度こそ、最も有難いものなのでは？ ・ ・ PUKU が終わってしばらく経った今、こうも思っています。

客観的・短期的に見ると、PUKU が直接社会に与える価値は微々たるもの。個人的に、立ち上げ初期から関わり活動する中で、また様々な外部の方々とお話する中で、そのように感じたし、今でも変わりません。しかし、PUKU はまだまだこれから、発展途上です。互いが近付くきっかけ、共に問題解決のために動く場は、PUKU をおいて他にないと思います。私達が感じたこの企画の価値が、より多くの人に認めて頂ける日が来ることを、春に卒業を控えた初代スタッフとして願っています。

## 【お知らせ】

PUKU の活動報告をお読み頂き、誠に有難うございました。

紙面では伝え切れなかったプログラムの魅力、および初年度活動の詳細に関しましては、ぜひとも私達の報告書をご覧ください：<http://www.puku-kyoto.info/PUKU/Report.html>

なお、PUKU は、2011 年度の開催に向けて準備を始めております。初年度の実績を活かし、さらに有意義な活動となるよう、今後も様々な方と関係を深めていきたいと存じます。PUKU にご興味をお持ちになりましたら、また、ご意見・ご感想等ありましたら、お気軽に [ccc.puku@gmail.com](mailto:ccc.puku@gmail.com) までご連絡頂ければ幸いです。

\*\*\*\*\*

## 【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sup>ドル</sup> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6 月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7 月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8 月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5	21.2	1.4	19.2	18.6
9 月	9.6	13.3	18.8	3.6	23.2	169	25.1	24.4	12.2	6.1	19.0	18.5
10 月		13.1	18.6	4.4	23.7	271	22.8	25.4	8.7	7.9	19.3	19.3
11 月		13.3	18.7	5.1	29.1	229	34.9	37.9	28.1	38.2	19.5	19.8
12 月	9.8	13.5	19.1	4.6	20.4	131	17.9	25.6	9.2	-13.3	19.7	19.9
2011 年												
1 月						65	37.7	51.4				

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( ) 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。  
出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。